

---

# THE TEAM ! (番外編) ~白真の告白~

緒例

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE TEAM!（番外編）～白真の告白～

### 【著者名】

ZZード

### 【作者名】 緒例

【あらすじ】  
「紫織はいつから白真と付き合つてる?」との疑問から事件は巻き起こる。そして、白真のファンクラブから紫織に魔の手が伸びていて・・・

第星学院高等部昼休み、

またまた「カレカノいない同盟」の一言から事件は始まる……。

「ねえ、しーちゃん」

「何?」

ポツキーをかじりながら、尋ねられた方向を紫織は向いた。

「色鳥君と付き合い始めたの? ていつ?」

「由と? うーん、確か中一だったかしら」

紫織は古い記憶をたどつていいく。

告白の言葉は印象的だったが、  
時期はそこまで覚えてない。

なんせ、生まれたときから一緒にいたので、  
自然に恋人になっていたというほうが正しいのだ。

「だけど急にどうしたの?」

もつともな疑問に、クラスメイトは溜息をついた。

「それがね、色鳥君のファンクラブがあるでしょ? 、  
どうもしーちゃんのこと調べてるみたいなのよ。

翡翠ちゃんみたいに呼び出しがかかるないといけない……。  
「心配しなくてもいいだろ? 、 紫織は下手三段だぜ? 」

快が話しに割つて入る。

今日の休憩時間は修と将棋。

お互に一步も引かないあたり、「この勝負は夜まで持ち越されそうだ。

「だけど、もしもってことがあるでしょ？」「そのときどうするつもり？」

鋭い指摘だが、快は平然として答えた。

「修、少し待った。だから心配要らないって。どうせお前らが動くし、俺達もいる。何より白のやつが俺たちより早く片付けるわ」

危機感などない。

なんせ、長年の付き合いで白真がどれだけ紫織のことを思っているか、

想像しただけでも怖い。そう、怖いのだ……

「まったく、TEAMは危機感の欠片もないのかしら……」

そして放課後……

「やあつー。」

道場には紫織の声がこだます。先輩相手にも何のその、快勝だ。

「さすが美原だな」

「ああ、美人だし、才女だし、しかも空手三段！」

「白の奴が羨ましいぜ」

隣で練習している合氣道部の男子からは、憧れのマドンナ的な言葉が漏れる。

「だけどよ、最近白のファンクラブが怪しい動きをしてるらしいぜ」「それ本当ーー！」

翡翠がひょっこり現れた。彼女は合氣道部である。

「本当だつたら教えて！  
紫織のピンチは私のピンチなのー！」

親友思いの彼女は食い下がる。

「それがさ、あいつら美原を待ち伏せしてやつたりまわつたりといつしきせ。  
しかもバスターまで雇つたつて噂ですよ」

それを聞いたとたん、翡翠はすぐに飛び出した。  
バスターが相手となれば、さすがの紫織も手加減できなくなる。  
その前に自分が片付けてしまつしかない！

「美原紫織か？」

声をかけられた方向にはバスターと思われる男達と、  
ファンクラブの女子たち。

「違うわよ、だけどその子も邪魔なの。やつて頂戴」

いつか翡翠を呼び出した上級生。

白の彼女は自分だと勘違いされたこともあつた。だが、いつも紫織が簡単に片付けてくれていた。自分のやさしさを知つていてくれたから……。

「 そうか。まつ、可愛ければ問題ないがな。」

ぞろぞろと翡翠のほうに攻め寄つてくる。

「私はTEAMのバスターよ！」

翡翠はさつと構えると、男達は爆笑した。

翡翠に振り下ろされた。ぶしが簡単に空を切り、

「...」ひせ

男は十メートル近く投げ飛ばされた。

合意道筋である」と、「お詫びと感謝した」とはなし、手加減をまだすることができるからだ。

すべて言い終わる前に飛び蹴りが入る。

「紫織！！」

「翡翠……ダメでしょ……治療兵がこんな奴ら相手にして、もし怪我でもしたらいざるあるの……」「だつて、紫織がピンチだつていうから……」

涙目になつて翡翠が言つて、

「大丈夫よ。」TEAMに手を出した」と以前に、翡翠に手を出した」ことから、思に知らせてやつね……」

そのときの形相に、翡翠以外のものが悪寒を感じた。

「当分、私達に手出しどめなことあげなくちやね……」

そして紫織の周りに無数のナイフが出現する。

「ちょっと待てよ…………

」の女まさか「アートの女王」か……」

「間違いねえ…… 最悪だ……」

「アートの女王」。それは紫織の掃除屋界での通り名だ。とある空間に仕舞いこんであるさまざまな武器を、自分が取り出したときに取り出して戦う換装士。特に紫織は趣向を凝らした戦いをするので、その名がつけられたのである。

「その通り。タイトル「死の彫刻」……」「ぎやああああ……」

そして帰り道・・・・

「まったく・・・・・隨分ひびこりとやつたな」

「「めん」「めん、ついね」

快の苦労を一つ増やしたことに対する謝りとして、  
紫織は軽く謝った。

「だが、翡翠も無茶すんなよ。

お前は大事な治療兵なんだから」

「「めんなさい」

傍から見れば間違いなく告白にも取れないこの言動。  
しかし、翡翠がそれに気づくわけもない。

「それと、紫織に一つだけこいつておきたことがある」

「何?」

「白とお前が付き合い始めたのは中一の五月十三日だ。  
白の奴に毎晩の余話言つたら嘆いてただ」

おそらく泣きついたに違いない。

快の制服がなんとなく詩話になつてこいる気がする。

「そつか・・・・・だけどね、

日にち以上にあいつの生白の言葉のほうが印象的だったのよ

「何つて言つたの?」

わくわくしながら翡翠はその言葉を待つ。  
快もそれは聞いてないのか耳を傾けた。

「あいつね・・・・・」

「共产党宣言」

「何だ?  
風邪か?」

剣道の防具を脱ぎながら修が尋ねる。

「いや、紫織が俺の」とを憶えてるだ」ただ

「さしてですか」

悪友の惚氣などさらさら修は興味ない。

「だけど、紫織が今日も紫織と間違えられて絡まれたみたいだから  
や、

怒つてゐる。穢やかに語つてもキレてゐる。

「だからさ、紫織に伝言頼むよ。

『告白の日は忘れて、俺の誕生日だけは覚えてろー』って

白眞の誕生日は五月十三日だつた・・・・

(後書き)

今回は紫織ちゃんの話を書いてみました！  
ただし、恋愛というより友情の話ですね・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7492d/>

---

THE TEAM！（番外編）～白真の告白～

2010年10月21日07時30分発行